大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

五井蘭洲著『茗話』写本における未翻刻部分の存在について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯城, 吉信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007526

五井蘭洲著『茗話』写本における未翻刻部分の存在について

湯城吉信*

The Existence of Unprinted Part of Goi Ranshu"Meiwa"

Yoshinobu YUKI*

要旨

江戸時代の五井蘭洲が著した『蘭洲茗話』は、現在刊本（1911 年刊）が通行している。だが、実は写本も存在する。本稿では、筆者による『茗話』写本の調査結果を報告する。特に注目すべきは、刊本『蘭洲茗話』（上下巻）にはない中巻が存在することである（上下巻にも刊本にない条が見える）。また、写本は、刊本とは表記上の違いもあり、刊本からは得られない多くの情報を含んでいる。

キーワード: 五井蘭洲，『茗話』，『蘭洲茗話』，懐徳堂遺書，懐徳堂，『源語提要』，木村兼葭堂

1．はじめに

五井蘭洲著『茗話』は、江戸時代の儒学者兼国学者であった五井蘭洲（1697-1762）が著した札記である。「茗話」というのは茶を飲む時の話題という意味で、自らの書物を謙遜した命名である。和漢の該博な知識を駆使して、言語・事物について幅広い考証や自らの考えなどを開陳している。考証学の資料としても、五井蘭洲の学問・思想を探る上でも貴重な書物である。

この『茗話』は、明治 44 年（1911）、『蘭洲茗話』と題して懐徳堂記念会から懐徳堂遺書の一つとして翻刻された。以後、その元になった写本の所在が知られなかったために、専ら刊本『蘭洲茗話』が通行していた。だが、筆者が調査したところ、数本の写本が存在し、刊本『蘭洲茗話』には見られない多くの貴重な内容が含まれていることがわかった。本稿では、その概要を報告し、特に重要だと思われる未翻刻部分の中巻からは、全 74 条の中 10 条を翻刻したい。

2．五井蘭洲著『茗話』の写本の存在について

本章では、『茗話』のテキストについて紹介したい。

（1）刊本『蘭洲茗話』

このテキストは、明治 44 年（1911）、『蘭洲茗話』と題して懐徳堂記念会（代表西村時彦）から懐徳堂遺書の一つとして翻刻された（松村文海堂刊）（以下、刊本と言う）[1]。書名は、本文冒頭（および柱題）には「茗話」とだけあるが、外題（および内表紙）は「蘭洲茗話」となっている。「茗話」では曖昧なので「蘭洲茗話」と題したのだろうが、この刊本の**『蘭洲茗話』が書名として定着したために**、以下紹介する**写本『茗話』が看過されてきた可能性が高い**（かく言う著者もそうである）。上巻 29 葉、下巻 38 葉で、上下巻ともに冒頭に「蘭洲五井先生著　外孫長島宜泰校」とあり、下巻末尾には「後学大道弘雄校」とある。長島宜泰（＊ながしまたかひろ？）は未詳だが蘭洲の末裔なのだろう。大道弘雄は、朝日新聞にいたらしく、著書も多数ある。同じく朝日新聞にいた西村時彦から校訂を依頼されたのであろう。現在、『茗話』が参照される場合はまずこの刊本である。振り仮名は基本的にない（例外：下 11b「文貝（アヲガヒ）」）。

（2）中之島図書館写本

上記刊本『蘭洲茗話』について、大正 2 年（1913）の日付が見える『懐徳堂記念会会務報告』（懐徳堂記念会編纂）に以下のようにある（第四章「記念刊行」p.42）[2]。

蘭洲茗話　二冊

大阪府立図書館本を底本とし、数種の伝写本を以て対校し、一冊に合装せり。

ここに言う底本は、現在、大阪府立中之島図書館に存在する（041/24）（以下、中之島写本と言う）[3]。外題はなく、内題は、上巻は「茗話」、下巻は「蘭洲茗話」（上巻の「茗話　蘭洲五井先生著」の略であろう）となっている。上下 2 巻で、刊本同様、上下とも冒頭部に「蘭洲五井先生著　外孫長島宜泰校」とあり、収録されている文章も刊本と一致する。ただ、下巻の冒頭に「無名氏」と

2016 年 8 月 22 日 受理

＊ 総合工学システム学科　一般科目
(Dept. of Technological Systems : Liberal Arts)

あることや、本文中に振り仮名や訓点が見られる点は、刊本と違う[4]。

それでは、対校に使われた「数種の伝写本」は存在するのか。『中庸首章解』『承聖篇』など蘭洲の他の和文作品の写本が複数存在することからすると、『茗話』にも複数の写本が存在したのであろう。だが、現在までの筆者の調査で確認できた写本は、中之島写本以外では、国立公文書館内閣文庫所蔵（旧木村兼葭堂蔵書）の『茗話』（212-0256）（以下、内閣写本と言う）[5]、および大阪大学附属図書館所蔵の『茗話』(914.5/GOI/1-1～3 / 国文学)（以下、阪大写本と言う）の 2 本である。

（3）内閣文庫写本

内閣写本は、上下巻で、書名は、外題、内題ともに「茗話」となっている。作者については、内題の後に「無名氏」とあるだけで、「蘭洲」の文字は見えず、蔵書登録でも作者が記されていない。(作者の署名が無名氏であったことも『茗話』の写本の存在が認識されなかった原因であろう。）木村兼葭堂死後、兼葭堂の蔵書が幕府に召し上げられた際、江戸に送られたものである[6]。

振り仮名もあるが以下の阪大写本ほど多くない。また、抜けている条があったり、順番が他の写本と違う箇所もある（注 5 参照)。他の写本にない内容も若干見られる点は貴重であり、あるいは草稿の様子を留めるものかもしれないが、丁寧に写された写本ではない。

この写本は、来歴からしても、内容からしても（刊本にない条（上 59 条）がある)、対校に使われた写本である可能性は低い。形式面では、罫線のある用箋に書かれている点が他の写本とは違う特徴である。

（4）大阪大学写本

一方、阪大写本は、来歴は未詳だが、大阪大学文学部国文学科が購入し（受入印「昭和 31.10.6 受入」)、後、図書館に移管されたものである。現在は、和書の貴重書として、懐徳堂文庫とは別の場所で保管されている。だが、この写本も、翻刻の際、対校に使われた写本とは考えられない。それは、この阪大写本には刊本にない内容が存在するからである（逆に、刊本及び中之島写本にあって阪大写本にない文言も存在する)。両者をきちんと対校したのであればこのようになることは考えられないだろう[7]。

要するに、以上の 3 写本は、それぞれが他にない情報を含んでおり、お互いに継承関係のない写本であると考えられる。

さて、以下、大阪大学附属図書館所蔵の『茗話』を調査した結果を報告したい。それは、先に述べたように、この写本には刊本にはない多くの内容を含んでおり、刊本からは知ることができなかった多数の貴重な情報を含んでいるからである。また、阪大写本は、振り仮名などの表記面でも中之島写本より詳しく（他の和文作品の写本のそれに近いため)、蘭洲筆の原本に近いものだと考えられる。特に注目すべきは、①刊本には存在しない**中巻が存在すること**、刊本にある上下巻においても、全篇に渉って②**表記上の違い**があること、③**刊本にない条**があることである。

ただ、残念なことに、この阪大写本は虫食いによる破損が激しく、判読不能な箇所もある。特にのどの部分は貼り付いていて剥がすことが困難な箇所もある。本稿では推測できる箇所は文字の後に「？」をつけ、推測不可能な場合は「□」で示している。

図 1　阪大写本『茗話』中巻冒頭
（大阪大学附属図書館蔵）＊虫食いが激しい。

〔翻刻部分凡例〕

・虫食いの欠損により字が確認できない箇所は「□」で示している。連続して欠落しており字数も明らかでない箇所もある。

・漢字は通用字体を採用した。

・振り仮名は振られている箇所の後ろの（　　）内に示した（『中庸首章解』などと同様、振り仮名の活用語尾と送り仮名が重なっている場合もある)。左にもある場合は（右：＊＊、左：＊＊）と表記した。

・原文の「、」（読点）は適宜取捨選択し、「、」（読点）と「。」（句点）に分けた。

・適宜、「　　」（引用符号)、『　　』（書名符号）を施した。

・葉数の表し方：24a（b）は 24 葉表（裏)

3．阪大写本『茗話』について

（1）概要

・サイズ：縦 26.2×横 18.8cm。
・受入印「昭和 31.10.6 受入」117549～117551
・上中下三巻：上 45 葉、中 51 葉（刊本にはない）、下 65 葉。
・虫食いが激しい。ほとんど読めない箇所がある。また、紙も合わさっていてめくれない箇所がある（特にのど（書脳）の部分）。虫食いは帙にまで貫通している。阪大所蔵以降のものであると思われる。
・振り仮名がある。左にもたまにある。（『中庸首章解』『承聖篇』など蘭洲の和文と似る。）振り仮名は、中之島写本よりも多く、これも、『中庸首章解』『承聖篇』など蘭洲の和文と似る（より蘭洲原本に近いであろう傍証）。
・漢文には訓点が付けられている。（蘭洲がどう読んでいたかわかる。）
・見せ消ち、胡粉による訂正もままある。
・段落（条目）の始めに圏点（○）があり、話の始まりがはっきりしている。（『中庸首章解』『承聖篇』など蘭洲の和文と同じ。）→刊本の上下巻において冒頭が不明確な箇所もはっきりとわかる。
・書眉に注記がある場合がある。
・画の様子（上巻末尾…刊本にもあるがだいぶ違う。ヲコト点の図は同じようだ。）

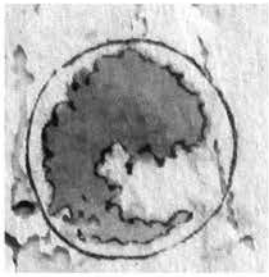

図 2　阪大写本の月図

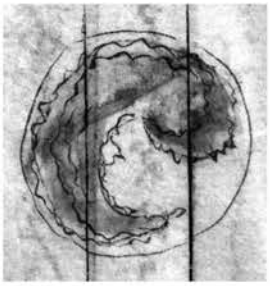

図 3　内閣写本の月図

図 4　中之島写本の月図

図 5　刊本の月図

・各巻冒頭内題下に「無名氏」とある。懐徳堂の著作では、中井蕉園の『杞憂漫言』と名づけられた蝦夷についての論文も冒頭に「無名氏」とある。自由な発言をしたいために匿名をかこったのであろうか。
・刊本の底本ではない。刊本にあって写本にない箇所があることからわかる。
①下 5a（10 条「大海のほとり」段）「蚊蝿は樊籠を笑ふ、いけぬま樊籠ひろきにはあらねど」がない。→この写本は刊本の底本ではない。（いくつかの写本が存在した。…『承聖篇』などと同じ。）この写本にも誤りはある。
②下 21a（「周亮工が書影に」段）「中国の如くうそをつくすべをしらずといひけり」がない。
③下 29b（80 条「二十をはたち」段）冒頭の「二十をはたち」がない。

（2）上下巻について

以下、上下巻の内容で、刊本と比べて特筆すべき点を挙げたい。すなわち、「刊本にない段」「刊本との文字の異同」「刊本が分段を誤る箇所」「刊本では分段が不明確な箇所」「振り仮名で注目すべきもの」（蘭洲の読みがわかる箇所）である。これらは、刊本だけでは確認できなかった点であり、今後、刊本『蘭洲茗話』を読む際に必備すべき校勘記である。葉数、行数は刊本のものである。

上巻（阪大写本 102 条、刊本 101 条）
【刊本にない段】（1 条）＊葉数は刊本による。
①上 17b「続日本後記」の前に**「未之思也…」段**（59 条）あり（＊内閣写本もあり。「説」→「説く」）。
59 条「『未之思也、夫何遠之有。』遠くとも行て逢みねば思に？あらずと説はあさし。思ふが実なれば、遠近の差別（しゃべつ）はなし。たとひ行とも、思ふ事の実ならずば、よみするにたらずとなり？。」
【注】○未之思也、夫何遠之有。　『論語』子罕篇にある。
【解説】行為よりも心を問題にする蘭洲の特徴が現れている。

【刊本との文字の異同】
＊阪大写本が正しいとすれば、刊本（及び中之島写本）の誤り。
・上 1a（1 条）1 行目：刊本「遁ことだ」（中之島写本「遁ことば」）→写本「遁辞？（のがれことば）」
・上 8a（22 条）1 行目：刊本「界」（＊中之島写本も）→「堺」
・上 11b（38 条）後から 2 行目：刊本「俗士流」（＊中之島写本は曖昧だがおそらく「俗寺院」）→「俗寺院（てら）」＊院の字は曖昧だが、「てら」という振り仮名があるので「院」だと思われる。
・上 18a（62 条）後から 4 行目：刊本「行る」（＊中之島写本も）→「する」
・上 18a（62 条）後から 3 行目：刊本「つづけ」（＊中之島写本も）→「つづき？」
・上 23a（78 条）1 行目：刊本「無花菓」（＊中之島写本も）→「無花果」

・上 28a（97 条）8 行目：刊本「その奸は」（＊中之島写本も）→「その奸を」、
・上 28a（98 条「年歯をもて」段）後から 5 行目：刊本「自らゆする」（＊中之島写本も）→「自らゆづる」
・上 28b（99 条「万葉集」段）6 行目：刊本「誠にふかき」（＊中之島写本も）→「誠にふるき」

【刊本が分段を誤る箇所】

（段落を改めるべきなのに改めない箇所）
＊写本では○をつけて別条として記されている。
・上 6b：9 行目「生るる子～」（14 条）
・上 6b：12 行目「力の極て～」（15 条）
・上 8b：7 行目「或人の申に」（25 条）
・上 9a：9 行目「荀子（じゅんし）の説に～」（29 条）
・上 25b：1 行目「延喜式に～」（50 条）
・上 29a：後から 4 行目「余が（×「の」）家に斎部（ゐんべ）～」（102 条）

【刊本では分段が不明確な箇所】

＊刊本では、行頭に来るが、前の行も一番下まで字が埋まっているので、見た目では別段落に見えない箇所。
・上 5b：2 行目「広間に～」（12 条）
・上 10a：3 行目「つよき弓～」（33 条）
・上 11b：後から 4 行目「人家の器物～」（38 条）
・上 19b：4 行目「犢鼻褌を～」（68 条）
・上 21b：後から 2 行目「明の詩家の～」（75 条）
・上 22b：4 行目「又かかる流を～」（77 条）
・上 28a：後ろから 5 行目「年歯（よはひ）をもて～」（98 条）

【振り仮名で注目すべきもの】

＊蘭洲の読み方がわかる箇所（訓読以外）。
＊刊本は中之島写本通りの場合と写し間違えている場合とがある。内閣写本は、前半は阪大写本と同じ場合が多いが、後半はない場合が多い。
上 1a（1 条「世間の人」段）刊本「遁ことだ」（＊中之島写本「遁ことば」）→「遁辞？（のがれことば）」
上 2a（3 条「夜宴に」段）刊本「夜宴」（＊中之島写本「夜宴（よふるまひ）」）→「夜宴（よふるまひ）」
上 3a（6 条「或人雷を」段）刊本「あらそふ」（＊中之島写本も）→「激薄（右：げきはく、左：あらそふ）」（＊内閣写本「激薄（アラソヒウツ）」）
上 4b（7 条「委巷叢談に」段）刊本「機功」（＊中之島写本「機巧」）→「機巧（たくみ）」（刊本「はうてん」（＊中之島写本も）→「暴殄（ほうてん）」）
上 5b（12 条「広間に」段）刊本「すきを見合せ来り」（＊中之島写本も）→「偸閑（すきを見あはせ）して来り」
上 8a（22 条「界（ママ）の府に」段）刊本「子午針」（＊中之島写本も）→「子午針（ジシャクハリ）」
上 8a（22 条「界（ママ）の府に」段）刊本「いひわたし」（＊中之島写本も）→「号令（いひわたし）」
上 8b（24 条「天王寺」段）刊本「亀泉」→「亀泉（カメイ）」
＊亀井は四天王寺境内にある霊水。現在、石彫の亀から水が出るようになっている（『蘆分船』第一「是は印度無熱地より竜宮城へ銀樋をかけ、また竜宮より天王寺へかけたる所の霊水なりとかや。」）。
上 9a（28 条「世人事を」段）刊本「程道明」（＊中之島写本「程明道」）→「程明道（ていみょうとう）」
上 9b（29 条「荀子の説に」段）刊本「蠢然」（＊中之島写本「蠢然（左：うごめく）」）→「蠢然（うごめく）」
上 12b（43 条「世には」段）刊本「ほめすぎ」（＊中之島写本も）→「虚誉（ホメスギ）」
上 14a（47 条「辯をもて」段）刊本「いひつのり」（＊中之島写本「いひつのる」）→「屈（いひつめる？）」＊振り仮名がはっきり見えない。
上 15b（51 条「並河翁（なびかわう）いふ」段）刊本「我なかま」（＊中之島写本も）→「我党（右：わがとう、左：なかま（←「党」の横））」。刊本「くせ」（＊中之島写本も）→「弊（くせ）」。…荻生徂徠を批判する箇所なので重要。
上 23b（82 条「総角」段）刊本「両丸髻」（＊中之島写本「両丸髻（けつ）」）→「両丸髻（右：りゃうぐはんけつ、左：うら？こわけ）」
上 24a（87 条「中庸素其位」段）刊本「訳者」（＊中之島写本「訳者（やくしゃ）」）→「訳者（左：かなつけるもの）」
上 25a（89 条「客庁の番直」段）刊本「客庁」（＊中之島写本「客庁（右：かくてい、左：ひろま）」）→「客庁（右：かくてい、左：ひろま）」
刊本「番直」（＊中之島写本「番直（とまりはん）」→「番直（右：ばんちょく、左：とまりはん）」
上 25b（90 条「からすは」段）刊本「鄙賤」（＊中之島写本も）→「鄙賤（きたなき）」
上 27a（95 条「生るものに」段）刊本「微」（＊中之島写本「微（び）」）→「微（右：び、左：ちゐさき）」
上 27b（96 条「鳳語随筆」段）刊本「龍潜」（＊中之島写本「龍潜（ただびと）」）→「龍潜（れうせん）」＊中之島写本に訓がある点、要注目。
上 27b（97 条「世間は」段）刊本「世間」（＊中之島写本も）→「世間」（よのなか）、刊本「秋税」（＊中之島写本「秋税（ねんぐ）」）→「秋税（ねんぐ）」
上 28a（98 条「年歯をもて」段）刊本「年歯」（＊中之島写本「年歯（よはひ）」）→「年歯（よはひ）」

上28b（101条「月の中の」段）刊本「地影」（＊中之島写本も）→「地影（ぢがかげ）」

下巻（阪大写本104条、刊本100条）

【阪大写本の漏れ】

＊阪大写本が刊本の底本でない証拠。この写本にも誤りあり。

下5a（10条「大海のほとり」段）阪大写本では「蚊蠅は樊籠を笑ふ、いけぬま樊籠ひろきにはあらねど」がない。

下21a（56段「周亮工が書影に」段）阪大写本では5行目の「中国の如くうそをつくすべをしらずといひけり」がない。＊『瑣語』上巻21aにも「『書影』曰莆田洪仲韋言有…」として同様の内容がある。

下29b（80条「二十をはたち」段）阪大写本では冒頭（2行目）の「二十をはたち」がなく、「三十をみそぢ」から始まっている。

【刊本にない段】（4条）

①下6b「しのぶずり」段（15条）の前に**「何のゆへ」段**（14条）あり。＊冒頭に圏点がないために飛ばされたか。

14条「何のゆへといふをしらず、新参（しんざん）の人は、立身（りっしん）を願（ねが）ふゆへ、其役（やく）を打はまり、前後（ぜんご）をかへりみずつとむれば、用立事も有。然れども、元来（ぐはんらい）其為（みのため）にする事なれば、多くはする？とどかぬなり。譜代（ふだい）古参（こさん）の人々をよくをしへ道びき、才知（さいち）あらしむやうに養（やしな）ひて、それぞれに役付（やくつき）あらんほどはよき事はあるまじき也。」

【解説】分を守るべきこと。

②下6b「昔百済国（はくさいこく）」段（18条）の前に**「むかし五万石（ごまんごく）」段**（17条）あり。

＊次段と冒頭が同じために飛ばされたか。

17条「むかし五万石（ごまんごく）の諸侯（だいみゃう）なれば、今も五万石なり。さて費（つゐゆる）ゆる所は、十万石の體（すがた）なり。これより家中（かちう）の知行（ちぎゃう）をひかへとり、百姓（ひゃくしゃう）よりしぼりとり、富商（かねかしや）の金銀（きんぎん）をかりてかへさず、新田（しんでん）金山（かなやま）の利（とく）を得んとす。いかんともすべからざれば、倹約（けんやく）の令（いひつけ）を出す。上下（かみしも）和睦（わぼく）せぬより、この令もおこなはれず、つゐに勝手（かって）巧者（こうしゃ）の人をかかゆる也。五万石の入（いり）をはかりて出す事を（＊以下b）すれば必（かならず）しも倹約するに及ばず。富商をたのむ事もなきなり。『国に三年の儲（たくはへ）なければ、国とはいはれず』と古人いへり。今は先納（せんなふ）とて、来年（らいねん）の年貢（ものなり）を先へとり立る、あやしむべし。」

【注】○国に三年の儲（たくはへ）なければ、国とはいはれず　『礼記』王制篇に「国無九年之蓄、曰不足。無六年之蓄、曰急。無三年之蓄、曰国非其国也」と見える。中井竹山『社倉私議』はこれを具体的に進言したものである。

【解説】蘭洲は『荘子郭註紀聞』で分に随うことを強調している。ここでは、お上も分を知るべきことを言う。懐徳堂は富裕な商人で支えられていた。蘭洲が商人側に立つのもうなずける。

③下20a「およそ詩賦文章」段の前に**「ある一郡主（いちぐんしゅ）」段**（54条）あり。

54条「ある一郡主（いちぐんしゅ）、帰城（きじゃう）のよろこびに、能（のう）あり。その先（さき）のとし、凶年（けうねん）にて飢餓（うゑひと）の者有しを、町村方（まちむらかた）の富有（ふゆう）にて救米（すくいまい）を出したる者ども、十人あまりを褒美（ほうび）として、この能（のう）を見せ給へり。書院（しょいん）の向（むかふ）に舞台（ぶたい）あり。その側（そば）に一間（ひとま）かこひしつらいて、其者（そのもの）（＊以下b）どもの坐（バ）とす。書院のかかり、舞台のさま、諸臣（けらい）伺候（つめどころ）の間、つきづきしく、きらびやかなるを、始て見たれば、皆々おどろき、威厳（いげん）を恐（をそ）れて、あえてたかく息（いき）する者もなく、敬跪（かしこまり）曲拳（手をつかえ）せり。その時、余ひそかに思ふ、この華麗（くはれい）なるさま、能（のう）、狂言（けうげん）の費（つゐへ）は、みなこれらの者共の作り出す租税（ねんぐ）より出来る事なるを、天より降（ふ）り地より湧（わき）けんやうに思ふは、いとおかし。郡主の御心は、いかがおはしけん、しらず。」

【注】○敬跪曲拳　「擎跽曲拳」（『荘子』人間世篇に見える「擎跽曲拳、人臣之礼也。」）のことだろう。

【解説】「その時、余ひそかに思ふ」とあるので蘭洲が実見したことを言うのであろう。「ある群主」とは津軽藩主か。

④下24a「西北の国に」の前に**「世上の語（ことば）に」段**（64条）あり。

64条「世上の語（ことば）に冥加（めうが）をおもへといふあり。冥加とは何の書に出たるやしらず。冥（めう）とは、現（右：げん、左：うつつ）と対（つい）す。人間ならぬをいふ。天といひても、鬼神（きしん）と見てもよかるべし。人、善（よきこと）をすれば、天道鬼神の加護（かご）し給ふとなり。『書経』（しょけう）にいへる、「天道（てんどう）福（さいわい）レ善（ぜん）ニ」の心なり。この事、識者（しきしゃ）といふべし。小人とな？り、語（ことば）になづみて、終（つゐ）に因果報応（いんぐはほうをう）（＊以下a）にながるるなり。」

【注】○『書経』　湯誥篇に見える。

【刊本との文字の異同】

＊阪大写本が正しいとすれば、刊本（及び中之島写本）の誤り。

下 12a（33 条「近年唐流（からりう）に」段）刊本×「第一相」（＊中之島写本も）→写本○「茅一相」＊茅一相は『絵妙』の作者。…明らかな間違い。

下 16b（42 条「富貴（とみたっとき）は」段）謝在抗（＊中之島写本も）→「謝在杭」か？（謝肇淛のこと）

下 16b　貴性（＊中之島写本も）→貴姓（たっときすぜう）

【刊本が分段を誤る箇所】

＊写本では○をつけて別条として記されている。

下 35a：3 行目「すべて生類～」（96 条）

【刊本では分段が不明確な箇所】

下 6b：8 行目「おるといふ～」（16 条）

下 9b：6 行目「昔若年～」（25 条）

下 10b：5 行目「兵器（ぶだうぐ）は～」（27 条）

下 17a：後から 3 行目「ある人の申けるは～」（44 条）

下 19a：2 行目「人を何とも～」（48 条）

下 24b：後から 5 行目「連歌家に～」（67 条）

【振り仮名で注目すべきもの】

下 4b（7 条「人の寿命」段）「賀筵（ふるまひ）」

下 5b（11 条「隣家に夜飲し」段）「夜飲（よふけまでさけのみ）」「衆客（あいきゃく）」「散（かへる）ずる」

下 6b（17 条「むかし五万石」段（刊本なし））「令（いひつけ）」

下 10a（26 条「本郷あたりの」段）「大家（だいみゃう）」「豪気（げんきもの）」

＊中之島写本 11a は、前者はなし、後者は「豪気物（げんきもの）」。

下 10b（27 条「兵器は」段）「兵器（ぶだうぐ）」

下 11a（28 条「天地の間」条）「固有（もっている）」

＊中之島写本「右：こゆう、左：もちまへ」。

下 14b（40 条「ある人とふ」段）「性（むまれつき）」

＊中之島写本「うまれつき」。

下 15a（40 条「ある人とふ」段）「制度（しかた）」「文為（かざり）」

下 16a（40 条「ある人とふ」段）「敷演（ときのぶる）」

下 16a（41 条「ある所に（刊本「或処に」）」段）「投入花（いけばな）」「宗匠（しせう）」＊中之島写本なし。

下 16b（42 条「富貴は」段）「矯激（ためすぎ）」

下 17a（42 条「富貴は」段）「辨（わきすぶる）ずる」

下 17a（44 条「ある人の申けるは」段）刊本「心も身もくろう」→「心身苦労（こころもみもくるしみ）」

下 18b（47 条「百年已前、人の学問」段）「素読（そよみ）」、「四書の講（こうだん）（刊本「講釈」）」「聞書（ききがき）」「字面（もじのおもて）」「解（がてんのゆく）する」「点付（かなつき）」「解（とく）する」「痼疾（やまひ）（刊本末行「やまひ」）…学問観なので重要。蘭洲には多くの「聞書」が残されていることも参照。

「百年已前、人の学問（がくもん）しける様子（やうす）を伝（つた）え聞（きく）に先素読（そよみ）し、大がい四書（ししょ）を読（よみ）おぼへ、さて四書の講（こうだん）を聞、つとめて聞書（ききがき）といふ事をし、字面（もじのおもて）をすまし、其より末書（まっしょ）を見て、ひとり心得、さて五経（ごきゃう）にわたり、おもしろき心生じ、これよりは無点（むてん）の書をよみ、つゐに古書（こしょ）を見て解（がてんのゆく）するに至れる也。…」＊末書は注釈の書。

下 19a（49 条「十月を」段）「解（わけ）」（＊解釈）

下 19a（50 条「園に薯蕷の蔓の尺ばかり」段）「薯蕷（やまのいも）」

下 19b（51 条「陰陽（をんやう）拘忌（ものいまい）」段）「拘忌（ものいまい）」

下 20a（52 条「詩経に」段）「高貴（れきれき）」

＊「れきれき」は『茗話』で様々な漢字に振られる（→中巻）。

下 20a（53 条「柚（ゆ）は」段）「巫祝（ねぎかんなぎ）」

下 20a（55 条「およそ詩賦文章の二道（ふたつ）」段）「情景（こころとけいき）」＊文学観。

下 20b（55 条（同上）「荘子の文は虚誕（うそ）をおもてに出したれば…」「左氏伝は…無稽（ふぎんみ）の言を信じてしるしたれば…」「浅陋（あさはか）の儒者」

下 21b（58 条「万物の変化は」段）「大塊（右：たいくはい、左：だいち）」「噫気（右：あいき、左：をくび）」「紅毛国（おらんだ）」…『荘子』の名言だと言う段。

下 21b（59 条「紅毛国（おらんだ）の人は」段）「紅毛国（おらんだ）」

下 23b（61 条「儒者といふ」段）「戦争（かっせん）」「迂（まはりとおし）」

下 26b（73 条）「小児（こども）のいたづらに」段）「小児（こども）」「中正（ただしき）」「功利（かうり）の術（しかた）」「迂濶（まはりとをし）」「捷径（はやみち）」…学問について述べるので重要。

下 27b（75 条「至人（しじん）に夢（ゆめ）なし」段）「被内（よぎのうち）」「胡乱（うろん）」（刊本「うろん」）「熟睡（よくねいりたる）」（刊本「ねいる」）

下 28a（75 条（同上））「睡中（いねたるうち）」

下 28a（76 条「道はもと」段）「高卑（たかきひきき）」

下 28a（77 条「古のとつかの剣」段）「纂疏（さんじょ）」（＊中之島写本「さんしょ」）

下 28b（78 条「ある小説（さうし）に」段）「小説（さうし）」

下 30a（82 条「世の習俗（ならはし）に」段）「習俗（ならはし）」
下 30b（83 条「あらし吹」段）「無味（あぢはひなし）」

（3）中巻について

以下、阪大写本において最も貴重な情報と言える中巻について述べたい。全条の翻刻を載せるのは紙幅上不可能なので、全条の概要を挙げ、その後に、特に注目すべき条を紙幅の許す限り翻刻する（10 条）。

中巻（74 条）
【振り仮名で注目すべきもの】
1a（「昨非庵日纂」段）「縉紳（れきれき）」「翕然（おしなべて）」
30b「姪肆戯場（ゆふじょまちしばゐ）」
＊様々な漢語に「れきれき」を当てている。→1a「縉紳」、15b「士大夫」、cf.下 20a「高貴」も）。

【全条の概要】●は最重要、◎は重要。○はやや重要。
1,流行を諫める（引用書『昨非庵日纂』）
2,「折（菓子折の折）」という語について（言語）
◎3,経と権とについて（思想）
4,「かぢ」という語について（考証・言語）
◎5,上に立つ人は学問すべきこと（思想）
●6,日本の桜は中国の重葉海棠（考証）
7,字突きについて（考証）
8,嫡子に相続させるべきこと（思想）
9,ご神体について（考証・神道）（引用書『真臘風土記』）
10,夏祭は盂蘭盆会に由らず（引用書『乾淳歳時記』）
11,しめ縄について（考証）（引用書『顔氏家訓』）
12,神籬・磐境について（考証・神道）（引用書『旧事記』『日本書紀纂疏』など）
◎13,「何代」について（思想・仏教への反駁）
●14,迂闊なることについて（思想）＊持軒のエピソードあり。
15,「如是我聞」に無用の牽強付会をすること（思想・仏教への反駁）附：伊勢の語・人丸神社への牽強付会
16,酒嚢飯袋について（考証）（引用書『抱朴子』：書名は出さず）
◎17, 日本に文字が伝わったのは古代に遡る（徐福の頃には確実、神武天皇にもあった？）（応神天皇の時初めて伝わったのではない）（考証・日本）（引用書『史記』など）＊持軒の説あり。＊長い（関心の深さ）。内閣写本下巻に同様の内容が見える。
18,漢字の起源・字を知っていることはよいとは限らない（考証、思想）（引用書『淮南子』）
19, 上古の特殊な誕生譚は捏造であること（考証）
○20,腹にものを貯めずに流し出すべきこと（思想・養生説）
◎21, 古代の日本（考証・日本）：日向から始まった（日本は中国の影響を受けた西から開けた）、天孫降臨説の否定（引用書『日本書紀』『旧事記』など）＊長い（関心の深さ）。
22,ひらがなの「ん」は「毛」、カタカナの「ム」は「某（の異体字）」（考証・言語）（引用書『万葉集』『延喜式』『老学庵筆記』『正韻』）
23,儒教を誣いる俗説について（思想・儒教）＊三輪執斎に言及。「別に論ぜり」は未詳。
24,古代の卜法について（考証）（引用書『橘窓茶話』『三代実録』）
25,夏祭の濫觴は御霊会（考証）（引用書『三代実録』）
26, 石の宝殿について（考証）（引用書『袁中郎集』）
27, 土地を数える「坪」の語源：一歩（ひとつ ほ）（考証・言語）
◎28,費隠禅師が『中庸』によって悟ったこと（思想・対仏教）
29,頓悟はない（思想・対仏教）（引用書『六門集』）
30,「つむぎ」について（考証）（引用書『急就篇』『書影』）
31,釣り針を「ち」ということ（考証・言語）
32,三つ子を褒賞すること（考証）（引用書『日本後紀』『国語』）
33,鵄尾について（引用書『紺*素雑記』＊原文：湘）
34,古来、瓦葺きは寺に限らず（考証）（引用書『続日本紀』）
◎35,伊皿子の麩（天野弥右衛門が人の道をわきまえたこと）（思想）
36, 『全浙兵制（ママ）』に見える日本の歌について（引用書『全浙兵制考』）
37,神の宿る「もり」について（考証・神道）（引用書『戦国策』『墨子』『史記』『万葉集』『爾雅』？）
○38,後藤祐乗作の小刀の義経の彫り物について（名匠についての逸話）
◎39,因果応報の説（思想・対仏教）（引用書『書経』『中庸』『淮南子』）
40,平上去入の四声は日本にもある
41,『新撰六帖』の歌の趣向について
42,遊郭と芝居小屋について（引用書『戦国策』：書名は出さず）
◎43,薬より日常生活に気を配るべきこと（思想・養生説）（引用書『文中子』）
44,朝鮮人参が法外な値段であること、その日本への渡来（引用書『続日本紀』：書名は出さず）
45,「あんばい」は「あぢはゐ」の転（塩梅や按排にあら

ず）（考証・言語）
●46,新しい道具は使うべきでないこと
○47,医者が多いと技術が下がること（売薬批判？）（思想・医薬）（引用書『津逮秘書』）
48,永銭の法の由来（足利義持の時、永楽銭を東に広め、鐚銭との交換比率を決めた）（考証）（引用書『ある小説（そうし）』）
49,日本の歌について（俳諧などの由来）（考証・文学）
50,仙薬に迷うべきでないこと（李抱真のこと）（思想・道教）（引用書『旧唐書』：書名は出さず）
51,「誕生」という語（考証・言語）（引用書『間中今古録』）
◎52,「祓」の原義（考証、思想）
53,開元銭から水銀を取ると小児の驚風に効くこと（考証）（引用書『書影』）
●54,「経済」に務めるよりまず自身を修むべきこと。附：王安石批判（引用書『論語』『孟子』）（思想）＊長い。
●55,中国の名称について（和文では「もろこし」、漢字では「漢」がよい）（考証、思想）（引用書『明史』）
56,八幡の臨時祭の謂われに異議あり―巫祝の言を信ずべからざること（考証、思想）（引用書『公事根源』）
57,芸に達した人は誇らないこと（思想）
58,往古の対馬の阿比留、在庁という姓について（考証）
59, 長歌について（考証・文学）
60, 唐太宗が仙薬に迷ったこと（考証、思想）
●61,王陽明の思想について―その評価すべき点と問題点（思想）
62,「主税」を「ちから」と読むこと（考証・言語）（引用書『延喜式』『礼記』）
63,一条兼良『日本書紀纂疏』の神代巻解釈について（仏意で解す、名称の不適、和語解釈の問題（「ふみ」は「踏み」ではなく「文」から））（引用書『万葉集』など）
●64,『源氏物語』について（＊『源語提要』凡例の第三条、第四条に対応）（考証、思想）（引用書『金剛経』）
◎65,津軽秋田の矢の根石（考証）（引用書『続日本後紀』：書名は出さず）
66,古語の「かけまくもかしこし」について（考証・言語）（引用書『万葉集』）
67,「かすみ」について（考証・言語）（引用書『万葉集』）＊「別に記す」は未詳。
●68,孟子を譏るべきでないこと（「格心」、附：管仲批判）（思想）
69,清盛を持ち上げた法師のいい加減な発言について（引用書『江談抄』）
70,道真を祭ったのは神の祟りを恐れてではなく藤原氏を抑えるため
◎71,清朝は明朝を横取りした（考証・歴史）（引用書『奏対録』）＊長い。
◎72,金持ちに生まれるのは不幸せ、貧乏人に生まれるのが幸せ（思想）（引用書『礼記』）
●73,性を知るべきこと（思想）
●74,諺の「一升入る嚢には一升ならでは入らず」について（考証・言語、思想（分の思想））（引用書『源氏物語』）

【特に重要だと思われる段】（10 条）

6,日本の桜は中国の重葉海棠（考証）3b-4a
○わが国の桜、もろこしにては何といふやたしかならず。『文選』（もんぜん）の詩に、山桜とつくれるは今の一重ざくらひがんざくらなるべし。『益部方物志』に、重葉（ちゃうえふ）海棠（かいどう）といふをあげしるして、「海棠に数種（すしゅ）あり、又時に小異あり、惟（ただ）其盛（さかん）なる者は重（ちゃう）葩畳蕚（がくにて）□□□□定種（ていしゅ）あるにあらず…のどの部分がくっついていて解読不能…□り、これより？江戸さく…日本にていふ海棠（かいだう）重葩畳蕚なるはなし。これは、棠梨（とうり）甘棠（かんたう）林檎（りんきん）の類なるべし。およそ海外より来れる草木は皆海の字を蒙（□□む）らしむ。然れば日本のさくらは蜀（しよく）の重葉海棠なり。この益部といふは、蜀のことなり。蜀の北は、西南のはてなり。三呉？の地とは万里隔りたれば、目に見たるひともなければ、絵にもかかぬなるべし。
【注】○『益部方物志』　宋・宋祈『益部方物略記』に「海棠大抵数種又時小異。惟其盛者則重葩畳蕚、可喜非有定種也。…」とあるのを言うか（四庫全書検索では『蜀中広記』巻六二「海棠」にも見える）。
【解説】蘭洲はサクラは重葉海棠だと言っている。竹山、履軒がサクラの漢字を議論したのは蘭洲の継承だとわかる。

14,迂闊なることについて（思想）8b-9a
○人の生れつきに迂濶なると聡敏（そうびん）なるとあり。迂濶なるに害すくなく、又古風を失はず。聡敏なる人に学術なさば、おほく功利（こうり？）にながる。予が先人は物きそはぬ人にて、老後ほとんど司馬徳操？（しばとくそう）の流（りう）なり？。ある時、人あり、「かん所にゆかん」といへるを聞給ひ、「婦女子（おんなわらべ）こそさはいへ、かはやとこそいふべけれ。」旁（かたはら）に人あり、「やはりせついんなるべき。」「かくあれば、これは尤」との給へり。かん所、せついん、豈厠（かはや）のことならんや。かはは外なり、やは舎なり。必外にあるものなればなり。古を好み名を正すは、おほく迂濶なり。かはやといへる、婦人、童子のしらぬことゆへ、聡敏なるより見れば、まことに迂遠（まはり？とをし）なり。

【注】○迂濶　8 条にも見える語。下 26b（73 条「小児のいたづらに」段）にも「人はかしこだてなるぞ物憂き。迂濶なるぞよき。迂濶と思へるが、上下古今に通じて害なし。はやみちなるはかならず害を残す也」とある。他、『蘭洲先生遺稿』上 91b にも「道本在迂濶、不在捷径。是故、孟子為迂濶（＊趙岐「孟子題辞」に見える）、蘇張為捷径、功利俗習也。殊不知迂濶之為捷径、捷径之為迂濶…」とある。○かはや　ここに先人という蘭洲の父・持軒著『和語集解』（懐徳堂記念会新収資料）に「カハヤ　厠　カハハ外也。厠ハ家ノ外ニ置屋ナル故ニ家ニアラズ、家外ノ屋也。屋ト名付ルハ雨ヲフセグオホヒ有故也。カフヤト云ハ転声也」と見える。○司馬徳操　後漢の司馬徽。字は徳操。荊州を支配していた劉表には仕えず、隠士として暮らした。『世説新語』言語第二の注に引く「司馬徽（別）伝」によると「佳（よし）」が口癖で、何を言われても「よし」と答えていたという（「好好先生」）。

【解説】父持軒のことに言及する点、貴重。

46,新しい道具は使うべきでないこと　32a-32b

○朝鮮（てうせん）の国には、何事によらず、あらたにはじめ出すことは、国王より大禁（だいきん）なりと聞えたり。ことはりなるかな。『荘子』（さうじ）に「機智（きち）ある者は機心（きしん）あり」といへり。つらつら見るに、世の風、人の俗は、ゆたかならねば、皆この機智（きち）よりぞおこ？るなる。すこしく才（さい）ありて、利をむさぼる者、必この機智を用ひ、ことをあらたに始め出すなり。農家（のうか）に用る稲（□ね）こき、千石（せんごく）とほしといふ物は、近きころより始れり。その前は稲を管にてしごき、箕（み）にて簸（ひ）たり。今此器（き）を用れば、其功倍（ばい）するゆへ、世こぞりてこれにおもむく。古、管箕（くだみ）を用ひてことのすみたれば、それにてすませたるぞよき。此新器（しんき）出来れば、をのづから用ひざればかなはぬ勢（いきほゐ）となれり。これをおして思ふに、我国の往古（わうこ）外国（ぐはいこく）の教（をしへ）入来らぬ先（さき）もよく治まれり。よく治まりたれば、制度（せいど）文為（ぶんゐ）もをのづから出来るべし。いま？だ出来らざる内に、外国の教（をしへ）入る（□り？）来るゆへ、幸（さいわゐ）としてそれを用ひ給へり。猶稲こき千石とほしの如し。

【校勘】○わうこ　「わうご」になっていたが、濁点は下の「くはいこく」に付くべきものだったと考えて取った。

【注】○『荘子』　天地篇に「有機械者必有機事、有機事者必有機心」とあり。蘭洲著『荘子郭註紀聞』五（25a）に「アヤツリノ道具ヲツカヘバ其カラクリノ所作アリ。カラクリノ所作アレバ、其胸中又オホチャクアヤツリノ心決テナクテカナハズ」と訳している。

【解説】反進歩思想。下 5b 第 12 条にも、新田開発反対の意見が見える。上 7a 第 18 条には、なくてよいものはなきに如かずという。

…世の中が便利さ（技術革新）を求めたこと。蘭洲はそうではなかったことがわかる。（cf.『民間さとし草』）

54,「経済」に務めるよりまず自身を修むべきこと。附：王安石批判（引用書『論語』『孟子』）（思想）35b-37a

○ある人とふ、「経済（けいざい）の学（がく）とはいかなることにや。答へていふ、「知り侍らず。」「経済（けいざい）は学者（がくしゃ）の任（にん）ずるごとくうけたまはるに、知らずとは？いかが。」学者の任ずる所は、己を修め、人を治むることと聞侍る。経済とやうありがましく、名目（めうもく）をたてていふに及ばず。」「経済の文字は、聖人の常経（じゃうけい）をもて、民を済（すく）ふとのこころなるべし。その経術をもて民を済ふこといかん。」「もろこしにて、経済を説（とけ）る書、あまたある。ここにていはば、農（のう）かた、河（かは）かた、地（ぢ）かた、金（かね）かたなどの有司（やくにん）の心得べきことどもをいへり。これらはいづくにても、それぞれの職（しょく）にあたれる人は、其術（じゅつ）にかなふなれば、其中にとり分てすぐ*れたるを撰（えら）みあげ給ふべし。『かん籩豆の事*は有司（ゆうし）存せり』の類（るい）なるべし。学者の庶幾（しょき）する所、聖人の経済をいはば、『修レ己以安二百姓一』*を目あてとし、『敬レ事而信、節レ用而愛レ人、使レ民以レ時』*とある根本に志し、其君を善に納んとするなり。『孟子』*『唯大人為二能格二君心之非一ヲ、一格レ君而国定』とあり。然るに、君心の非（ひ）を格（ただ）すべき大人（たいじん）は世にありがたし。先 君側（くんそく）に仕ふる人をえらみ、人のゆるすほどの才を用ゆべし。ことに幼君（ようくん）は猶以てこれを要（よう）とすべし。しからば君の御心よこしまなかるべし。これはすて置、唯事の上のみにてとすればよし、かくすればあししなどいふは、かの有司（ゆうし）の職（しょく）なり。宋（そう）の王安石（わうあんせき）政をと？り、様々の新法（しんぱふ）を始め、をのれ経済の学をよくすと思ふべけれど、ただちに天下の害（がい）となりたり。神宗帝（しんそうてい）のこころ、安石に？おほはれ給ひ、邪僻（よこしま）なるゆへ、朝庭（てうてい）の君子を皆しりぞけ、安石？に諂（へつろふ）ふ蔡京呂（さいけいりょ）、恵卿（けいけい）などいふ奸姦（かんねい）の人をよしと思ひ、あげ用ひ、人民を塗炭（とたん）におとし、終に夷狄（いてき）の乱（らん）おこり、崩ぜられては、僅（わづか）三十年あまり過て、天下を失（うしな）へり。是安石が君心の非を格（ただ）すことをしらず、ただ功利（こうり）の心をもて、しろうとざいくに治めんとせしゆへなり。たとへば、人の身は、飲食（い

んしょく）を節（せっ）し嗜慾（しよく）を慎（つつ）しみ、元気（げんき）を保（たもて）てば、をのづから疾病（やまひ）なし。薬物（やくぶつ）針灸（しんきう）をたのまず、もし外邪（ぐはいじゃ）ありとても、大なる害（がい）に至らず。然れば、人君を無病（むびゃう）にするこそ、学者の志*す所なるべけれ。此を外にしての経済は実にしり侍らず。

【校勘】○すぐ　「する」に見えるが改めた。○志　「忘」のようだが改めた。

【注】○籩豆の事…　『論語』泰伯篇に見える。蘭洲『論語解』泰伯篇（122b）に「籩豆ノ事ノ類末々ノ事ハ皆政ノ末ニテ本ニ非ズ。其政ヲ出ス君子ノ身ガ政全体ノ根本也」とある。○修㆑己以安㆒百姓㆓　『論語』憲問篇に見える。○敬㆑事而信…　『論語』学而篇に見える。○『孟子』　離婁上篇に見える。5条、68条でも取り上げている。

【解説】王安石評が見える（上28a第97条でも言及する）。功利に走った点を諫める（管仲評と共通する）。心をコントロールすることが大事（喩えに養生論）。

55,中国の名称について（和文では「もろこし」、漢字では「漢」がよい）（考証、思想）（引用書『明史』）37b-38b

○北畠准后（きたばたけじゅこう）、もろこしよりわれを東夷（とうい）といへば、われよりもろこしを西蕃*（せいばん）といふとの給へりとかや。蕃（ばん）は藩（右：はん、左：かき）と同じ。人の家（いへ）に屏（へい）ありて、ふせぎとなるに喩（たとへ）ていふ詞なり。わが国往古より、もろこしに使を遣（つか）はされ、留学生（りうがくせい）と称（せう）して、もろこしのこり留（とどま）り、もの習（なら）はせ給ふこと、世々にたえず。よりて、礼楽（れいがく）刑法（けいはふ）医暦（□□□）占卜（せんぼく）衣冠（いくはん）器物（きぶつ）文字（もんじ）詩賦（しふ）みなもろこしより習ひ来れり。わが国一王の法制（はふせい）を立給へること、『六国史』（りくこくし）にま□なり。然ればもろこしは、わが国の師なり。仁明（にんみゃう）天皇のみことのりに唐（たう）の帝を称して、大唐（だいたう）の天子（てんし）とのたまひ、其書簡（しょかん）を大唐（だいたう）の勅書（ち□□しょ？）としるされ、すべて唐とのみはしるさず。必大唐（だいたう）といへり。『延喜式』（えんぎ？しき）には、もろこしの幣物（へいぶつ）をしるす所に、大唐（だいたう）□□（はう）と標（へう）せり。これ□大てい君（きみ）として、尊（と？うと）ばせ給るなり。しかるをいかに？に名分（めいぶん）をただせばとて西蕃（せいばん）といはんは、理（ことは）りともいひがたし。もとより日本の藩屏（はんへい）ともならず、又、近世（きんせい）の儒者（じゅしゃ）は、もろこしを中華（ちうくは）、中国（ちうごく）と称（まう）す。しかれば、わが国を外夷（ぐはいい）とし自らあまんじ居るなれば、是ぞ誠（まこと）に名分（めいぶん）にさまたげあり。和文（わぶん）などにはもろこしといひてよけれど、漢文（かんぶん）をかく時、漢（かん）といひ唐（たう）といひては、劉漢（りうかん）李唐（りたう）の代に混（こん）じて差別（しゃべつ）し難（がた）し。『列子』（れっし*）にもろこしをすべて名づけて斉国（せいこく）といひ、『爾雅』（じが）には斉州（せいしう）ともいへり。これもろこしの異名（いみゃう）なれば、これを用る、可（か）也。雨森芳洲（あめのもりはうしう）『橘窓茶話』（きっそうさわ）にこれを用ひたり。しかるに、これも列国（れっこく）の時の斉（せい）、又、南朝（なんてう）の斉（せい）にまぎれたる。おもふに古より？用ひ来れる如く、漢（かん）を用べし。まぎらはしきは、其所の行文（かうぶん）の模様（もやう）にて、いかやうにもわかちあるべし。『明史』（みんし）真臘国（しんらふこく）の伝る文に、「唐人（たうじん）者（ハ）諸蕃（しょばん）呼（よぶ）㆓華人（くはひとを）㆒之称（せう）也」とことはりたれば、もろこしを？唐といふは、ひろく通用（つうよう）の詞（ことば）なり。

【校勘】○蕃　「番」に見えるが改めた。○れっし　「れ」は「ま」に見えるが「連」の崩しと見て改めた。○㆓（返り点）　ないが補った。

【注】○蘭洲が中国を斉と呼んでいる例。

「但斉州之闕（割注：斉州即漢）先我彊土…」（『蘭洲先生遺稿』上70b）

「老聃生於周末、斉州人皆化堯舜中正仁義之道、不俟其説。乃出関伝虚無於西域。達磨生於天竺、其俗狂釈迦天堂地獄之説、不暁其説、乃超海伝心印於東方。其道雖倶偏、其人可謂英傑矣。」（『蘭洲先生遺稿』下4a）

【解説】国際意識（中性的語を用いようとする）が見える点貴重。特に中国との関係（cf.陶徳民氏論文）ちなみに、蘭洲の父・持軒著『和語集解』（懐徳堂記念会新収資料）に、「もろこし」という和語を説明して以下のように言う。「モロコシ　漢土・唐諸越（モロコシ）也。本土ヨリ漢土ヲミレバ、外国ニスグレコユルニ因テナリ。又、諸事諸物ニスグレコユル義也。本土ヨリホメテ名付也。昔ハモロコシヘ人ヲヤリテ モノナラハシメタル也。讃美スルモコトハリ也。」

61,王陽明の思想について—その評価すべき点と問題点（思想）40b

○明（みん）の王陽明（わうやうめい）の説（せつ）を立らるる、皆、自ら試（こころ）みていへることなれば、ことはりならざるはなし。ただ、これを聖経（せいけい）にひきあはすれば、時々牴牾（ていご）すといふ。其牴牾するところは、その強辯（けうべん）をもてしゆるゆ

へ、諸儒の駁議（ばくぎ）をまぬがれず。「あぱれ聖経によ？らずして説れよかし」とおもへど、又、それにてみづから一家をたつるやうにてやすからぬと見えたり。
【解説】蘭洲が王陽明を評価する点と認めない点がわかる。

64,『源氏物語』について（＊『源語提要』凡例の第三条、第四条に対応）（考証、思想）（引用書『金剛経』）42a-45a
○『源じものがたり』は、世人のあまねく見る書なれば、見ざるもそうぞうしかるべければ、一閲（えつ）し侍るに*、其書、桐つぼより始めて、まぼろしにて終る、皆まぼろしの如くにて、実（じつ）にあらぬといふをしめす。次の雲隠れには詞なし。源氏のとしごろの罪悪（つみとが）あらはれて終りのよからねばしるすに忍（しの）びずといふ心なるべし。又 匂（にほふ）の巻（まき）より始まりて、夢（ゆめ）の浮橋（うきはし）にてとぢめたり。皆夢の如くにて真（まことの）にあらぬといふをしらせたり。『金剛経』（こんがうきゃう）の「一切有為法如露亦如電如夢幻泡影（いっさいうゐはふにょろやくひょでんにょむげんほうえう）」より名づけしにや。匂の巻より作者*あらたまれり。さて、作者の主意（しゅい）あり。中ごろより、摂関（せっくはん）相国（しゃうごく）の任（にん）は、皆執柄家（しっぺいけ）にあり。皇子たち、たまたま左右の大臣に至り給ふ。其他（た）は皆官称（くはんせう）のあるまでなり。又僧となり給ふもおほし。御孫に至りては、世にかずまへられず。これをおもひて、光（ひかる）といふ皇子、ゆふぎり、薫（かほる）などの王孫を設（まう）けて、権位（けんい）あらしむ。又立后（りっこう）のこと、第四十二代文武（もんむ）天皇、淡海（たんかい）公の御むすめを、后（きさき）に立給ひ聖武帝（しゃうむ）を誕生（たんじゃう）し給ひて後、他姓（たせい）の后となり給へるは、檀林（だんりん）皇后のみ*。他姓の女御（にょご）更衣（かうゐ）に皇子おはしても、中宮（ちうぐう）とはならず、ただ藤氏（とうし）のみ后となり給ふ。藤氏にても、庶氏*（そし）にてはしからず*。これをおもひて、源氏の女子をおほく中宮とせり。このころ春日のおほん神の託（たく）と称（さう）して、藤氏ならぬ后は、神の御心にかなはず、などいひなせり。よりて、乙女（をとめ）の巻（まき）に、源じの打しきり后に居たまはんこと、世の人ゆるしきこえずとかけり。然るに、古神武（じんむ）天皇、日向（ひうが）の吾平津媛（あひらつひめ）を后に立給ひしより、御代々もろもろの姓より后に立給ふ。されど、春日（かすが）の神の怒（いかり）をきかず、およそ代々（よよ）のみかどの内に、聖武（しゃうむ）帝ほど仏神を宗尊*（そうけん）し給ふはなし。又天変地妖（てんぺんちよう）風旱（ふうかん）疾疫（しつ？えき）叛逆（ほんぎゃく）姦人（か？んじん）のおほく出たるはなし。藤氏にとりても、房前（ふささき）公薨（こう）ぜられてより（＊737 年）、打つづき、麻呂（まろ）卿、武智麻呂（む？ちまろ）卿、宇合（うがう）卿卒（しゅ）し給ふ。春日御神の御子孫の御腹（はら）より降誕（ごうたん）ありし聖武帝の御時なれば、神慮（しんりょ）にかなひてかくはあるまじきにあ*らずや。又、貴家（きか）の子弟（してい）は、皆小児より高位なれば、自らをごりたかぶり、才徳（さいとく）のなければ、ゆふぎりを六位（ろくい）より昇進（せうじん）あらしむ。又、淫風（いんふう）の甚しきをいましめたり。源じおぼろのことより起（をこ）り無実（むじつ）の讒言（ざんげん）行はれ*、須磨（すま）の蟄居（ちっきょ）ありしを、帰京（ききゃう）の後、こりもせず、又おぼろにみそかごとありしなり。いかなるいろごのみも*弾指（右：だんし、左：つまはじき）すべし。尤甚しきは、藤壺（ふぢつぼ）のことなり。須まにてやをよろづ神もあわれとおもふらん、おかせる罪（つみ）のそれとなければとよめりしに、俄（にわか）に大風大雷にて此世（よ）もつきぬべき変（へん）をかけり。中臣祓（なかとみはらゐ）に子（こ）と母（はは）とおかせる罪（つみ）とあり。藤つぼは母（はは）の位（くらゐ）の人なり。是に通（つう）ぜられたるは、誠に母をおかせるつみなるを、罪なきとよめれば、かく天神（てんじん）のい*かりまして、大変ありしといふ心かきなしたり*。尤婦人（ふじん）の淫風（いんふう）をいましめたり。人の妻妾（さいせう）として、二心ありて、源じに心を通（つう）じたる女は、皆尼（あま）になしたり。その尼になりたるを見て、実（じつ）に源じに心よせたるをしるべし。これ筆誅（ひっちう）の意（こころ）なり*。又作者のこころに、女子の漢学（かんがく）あるをにくめり。ゆへにひるくひのことをかき、この*作れる詩も、女のえしらぬことまねぶは、にくきことをうたてあれば、もらしつなどいへり*。又、公卿（くぎゃう）の間に、漢学（かんがく）のおとろへたるをうれへ、ゆふぎりを入学（にふがく）させ、博士（はかせ）など*を世にあらせ、漢学（かんがく）なくては、いはゆるやまとだましゐの、世に用をなさぬといふをしらせたり。又、受領（ずれう）の廉潔（れんけつ）なるは、貫之（つらゆき）の如く、土佐（とさ）の任（にん）はて、帰（き）京のとき、銭（ぜに）なくて、米（こめ）もて魚（うを）に代（かへ）られたり。此ものがたりには、受領のとみさかへて、宝おほくもてること、所々にしるし置り。これらおもふことなきにしもあらじ。定家卿*の「ただ此文は詞花（しくは）言葉（げんやふ）をもてあそぶべし」とは、よくやすらかにの給へど、作者の主意（しゅい）は、明らめられずといふべし*。しかるに、此書をとける注*、汗（あせし）牛（うしに）充（みつる）棟（むなき）に及べども、

ただ「みつがひとつか*」などいふことを大事として、人情俗態（にんじゃうぞくたい）の教（をしへ）となるべきことは、得見付ず。さて此？匂の巻より浮はし迄は大弐三位のかきつきたる*にて、『源じ』の後篇といふべし。見る所は皆、前篇（ぜんぺん）にあり。

【校勘（すべて『源語提要』凡例との異同）】○一閲（えつ）し侍るに　以上はなし。○作者　「文てい」。○皇后のみ　「なり」あり。○庶氏　「庶流」。○しからず　この後文言あり。○宗尊　「尊崇」。○にあ　「事な」。○行はれ　凡例「行はれて」、村田本「いはれて」。○いろごのみも　「好色の人も」。○い　「は」？○かきなしたり　この後文言あり。○意（こころ）なり　この後文言あり。○この　「人々」？○などいへり　この後文言あり。○など　「ども」。○といふべし　以下なし。

【注】○一閲（えつ）し侍るに　「一度見てみた」は恐らくポーズ（『非伊編』冒頭で仁斎の書を見ていなかったというのと同様）。○定家卿　定家「詩花 一言葉を弄ぶ。」○明らめられずといふべし　以下、凡例にはなし。○此書をとける注　『源氏物語』の注釈については、子安宣邦校注『紫文要領』（本居宣長著）（岩波書店、2010 年）p.185 に挙げる『紫明抄』『河海抄』『細流抄』『明星抄』『湖月抄』などを言うのだろう。○みつがひとつか　葵の巻の文句「三が一つかにてもあらむかし。」諸説については『日国大』に見える。○大弐三位のかきつきたる　この内容は凡例ではずっと前にある。

【解説】この条は、『源語提要』凡例（全十三条）の第三条、第四条に当たる。凡例とこの条の文では、文が前後する箇所や若干の文言の違い（【校勘】参照）の他、第四条について『源語提要』凡例の方が分量が多い（補足内容がある）ことが大きな違いである。一方、この条の冒頭部と末尾は『源語提要』凡例には見えない（冒頭部：『源氏物語』を読んだ理由、末尾：世間の注釈書に飽き足らなかった理由）。以上のような違いから、この条（メモ）を拡充して『源語提要』凡例ができたのであろうと推察できる。

寓意を読むという点では、『荘子』に対する姿勢と似るか（論文①はそう読まないようだが）。また、漢学が大和魂を助けるという考えが見える点注目すべきである（「十厄論」と同じ趣旨）。

〔参考〕

①田中裕「源語提要・源語詁について」（『語文』第 10 輯、大阪大学文学部、1954 年）

②吉永登「五井蘭州著源語提要の凡例」（『関西大学文学論集』4 巻 4 号、1955 年）＊翻刻がある。

③中村幸彦「五井蘭洲の文学観」（『文学研究』、九州大学、1969 年、後『近世文藝思潮攷』（岩波書店）に収録）＊朱子学者として勧善懲悪説にとらわれているが、小説も取り上げていることは評価する。

④小谷野敦「『源語提要』の著者について―五井蘭洲と村田春海」（『明治大学文藝研究』、2003 年 3 月）＊別の著者著となっているが、実は同じ本で、本当の著者は蘭洲であると言う。両本の異同箇所も挙げている。

⑤『批評集成　源氏物語』第 2 巻「近世後期篇」（ゆまに書房、1999 年）＊村田晴海著となっている『源語提要』凡例の翻刻が収録されている。

68,孟子を譏るべきでないこと（「格心」、附：管仲批判）（思想）46b-47a

○『孟子』曰、「格君心之非。」孟子、戦国（せんごく）に生れ、時機（じき）に応（をう）ずる？□語あるゆへ、孔子をかねにして、非毀（ひき）する人おほし。これ皆孟子の皮膚（ひふ）をしれるのみ。この格心（かくしん）の一語もて？其学の孔子に異（こと）ならざるをしれり。君心の非を格（ただ）さずして、唯ことの上にて、傾（かた）むくをささへ倒（たを）るるをたすけたるのみにては、斉（せい）の管仲（くは□□□□□）□桓公（くはんこう）を助（た？す）けしなり。よりて、管仲（くはんちう？）死？□□、そのまま斉？（せい？）□みだれ、桓公卒（しゅっ）して、尸虫（しちう？）戸（と）□出、諸公子（しょこうし）□□□諸侯（しょこう）□ぎ？て、斉（せい）をせむ、尤あさはかなり。これ、管仲に格（かく）心の学なかりし故なり。此格心の一語、即先王の教法に？□、大学のよりて作る所なり。浮躁（ふそう）なる人、この説を聞しるし？、「是老生（らうせい）之常談（じゃうだん）にて、仏老（ぶつらう）の緒餘*（しょよ）」とて笑ふなり。移植（うつ□う□）たる？草木を見るに、其根（ね）よく土（つち）にしたしみつきて後、枝（えだ）□出づ。□の道亦如此なるべし。先 をのれを治めて後、物に及ぶ？、これ本根（ほんこん）を固（かたく）するの方（みち）なり。

【注】○『孟子』　『孟子』離婁上篇「惟大人為能格君心之非」。○管仲　管仲については『非伊編』でも取り上げている。○かね　蘭洲がよく言う「すみ曲尺（かね）」か（『論語解』などに見える）。物指し、引いて守るべき準則を言う。○管仲死…　「桓公病、五公子各樹党争立。及桓公卒、遂相攻、以故宮中空、莫敢棺。桓公屍在床上六十七日、屍虫出于戸。…孝公元年三月、宋襄公率諸侯兵送齊太子昭而伐斉。斉人恐殺其君無詭。斉人将立太子昭、四公子之徒攻太子。太子走宋、宋遂与斉人四公子戦。五月宋敗斉四公子師而立太子昭、是為斉孝公。…」（『史記』斉太公世家）。○緒餘　切れ端。

73,性を知るべきこと（思想）51a-52a

○世の人、家に名刀（よきかたな）をおさむれば、甚？愛重（あいちゅし）し其銘（めい）其長さ、やき刃（ば）のさま、又きれあぢをもよ？く覚（おぼ）え居（を）るなり。人ごとに、天よりあたふる至善（しぜん）の性（せい）、天下第一の宝（たから）を身にもたるに、かへりていかなるものといふをしらず。世には無用（むよう）の

文字（もじ）にをちいり、夢にも性をしらぬ儒者（じゅしゃ）もあり。誠にうろたえたる人といふべし。又聖賢（せいけん）の性をとくは、禅家（ぜんけ）のとくとは、大にことなれど、これをもさとさず、性よ心よ？といへば、おしなべて禅（ぜん）なりとす。これをたとふるに、鳥を食する者、とうがらを食ひてうましと覚え、肉のよろしきところは打捨（うちすて）てて犬猫（いぬねこ）の食するにまかするなり。性をしらぬ儒者*（じゅしゃ）□禅僧（ぜんそう）の聡敏？（そうびん？）なるにあひて、提撕（ていせい）*せられば？必儒を去りて仏に帰すべし。

【注】○性をしらぬ儒者　他の書でも似たことを言っている。例えば、『中庸首章解』序「…我身の中に、至りて貴き性あるをわすれ、中正の道に随ふことあたはず。」跋「今、学者として、天のあたふる所にて父母のとりつぎたるこの我性命はいかなるものといふをしらず、只、口に詩書礼楽のみをとくは、知者といひがたし。」○提撕（ていせい）　教え導く。

【解説】性を知るべきことを強調する。蘭洲は、天から受けた善なる性を大事にすることが最も重要だと考えていた。

74,諺の「一升入る嚢には一升ならでは入らず」について（考証・言語、思想（分の思想））（引用書『源氏物語』）52a

○俗語（ことわざに）に「一升いる嚢（ふくろ）*には、一升ならではいらず」といへり。これを漢語（かんご）に訳（なを）せば、「斗（と）唯（ただ）容レ（いる）斗（とを）」といふべきか。『源じものがたり』*に、「待*受給ふ御たもとのせばきには、大そらの星（ほし）のひかりを、たらいの水にうつしたる心地して」といへるも、此こころなるべし。人毎（ごと）にをのづからをのが定（さだ？）まれる分（ぶん）のあればにや、力におよばぬことのおほかめり。

【校勘】○待　「侍」に見えるが改めた。

【注】○一升いる嚢（ふくろ）　一升入る壺＝一升入りの容器には、どう工夫しても一升以上入らない。物にはそれぞれの限度がある、同じものはどこでも同じ、などの意のたとえ。○『源じものがたり』　「蓬生」の巻に「待ち受けたまふ袂の狭きに 、大空の星の光を盥の水にうつしたるここちして過ぐしたまひしほどに」とある。

【解説】分の思想について。蘭洲は『荘子郭註紀聞』でも各自の性分に随うことを強調している。

4．おわりに

本稿で明らかにしたように、**阪大写本**も数多く存在したであろう中の一写本であり、抜けもあれば（刊本にあって阪大写本にない文言（あるべき文言）がある）、些細な誤りもある。だが、内容、表記ともに、中之島写本より豊富で、**蘭洲原本により近い**ものだと推測できる。

特に、刊本には見えない**中巻の内容**は、今後の蘭洲研究に貴重な情報を提供してくれるであろう。中巻も上下巻同様、考証や思想表明がバランスよく散らばっている。そして、その内容を見ると、改めて蘭洲の関心の広さと博学さ（読書範囲）を確認することができる。例えば、札記でよく扱われる語源考証以外に、国際意識、博物学的興味（津軽に行った経験が大きいであろう）など蘭洲の幅広い興味・知識を垣間見ることができる。何より、その引用書の幅広さには驚かされる。これらの本は、たまたま目にしたのではなく、意図的に集めたのではないか。

具体的内容では、『源語提要』凡例と重なる内容が見える点、サクラが中国の何に当たるかの議論は特に注目される。蝦夷にせよ、サクラにせよ、後、中井竹山・履軒が議論した話題は、蘭洲に遡ることができることが確認できるからである。

また、語源説については、父・持軒著『和語集解』との関係が注目される。『和語集解』は『大阪名家著述目録』およびそれに基づき『国書総目録』で持軒の著として見えるが、実物はこれまで確認されていなかった。それが、平成28年度、懐徳堂記念会によって購入された。

ところで、この中巻が中之島写本や内閣写本にないのはなぜか。『承聖篇』で上巻だけを「全」と称しているテキストがある（大阪市立中央図書館本）ことからすると、単純に抜けた（抜いた）という可能性もあるが、**中巻が後から足された可能性**もある。それは、内閣写本において、中巻に見える内容を「後編に述べる」と附記している箇所があるからである（下巻8条の後）。これが蘭洲の草稿の様子を留めるものだとすると、上下巻が編まれた後に、その漏れたものを中巻としてまとめた可能性がある（上下巻が一応完成した後に、追加しようとすれば中巻として入れるしかなかったのではないか）。そうして、そう考えると、上巻が102条、下巻が104条あるのに、中巻は74条しかないことも理解しやすい。

注

(1) 現在は、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーに収められており、インターネット上で閲覧することができる。

(2) 吉田鋭雄編「懐徳堂先賢著述書目」（『懐徳』19号（1941年）所収）にも、これを受けて次のように言う。

是の書も手稿本は散逸して遺書中にはない。是は明治四十四年懐徳堂記念会に於て印行した懐徳堂遺書中の一で、当時大阪府立図書館本を底本とし、数種の伝写本を以て対校し、一冊に合装したものである。

(3) 拙稿「中之島図書館蔵懐徳堂関係資料目録」(『中国研究集刊』37 号、大阪大学中国学会、2005 年 6 月) では漏れていた。(蘭洲の著者カードに漏れていたため発見できなかった。)

(4) 中之島写本の書誌情報。

・縦 24 ㎝×横 16.6 ㎝。2 冊。上 32 葉、下 42 葉。表紙に題箋はない (上巻には「四一八号」という番号だけ貼られている)。(受入印「大阪圖書館・12088・明治卅八年八月卅一日」、「初代豊田文三郎」印)

・各条の初めに圏点 (○) がない点も刊本と一致する。

(5) 内閣写本の書誌情報。

・縦 22.8 ㎝×横 15.6 ㎝。1 冊。上 50 葉、下 64 葉。表紙は書き題箋で「茗話」とある。内題は、上巻「茗話上／ (改行) 無名氏」、下巻「茗話下／ (改行) 無名氏」。(蔵書印「兼葭堂印」「兼葭堂蔵書印」「浅草文庫」「日本政府図書」) 毎半葉 10 行の罫線の入った用箋に書かれている。

【上巻の様子】

・刊本にない 59 条はある。

・他本と順番が違うところがある。5 条の次に 73 条、35 条の次に 72 条。68 条の次に 71 条。96 条の次に 102 条。

・70 条「書経に」段がない。

・68 条 (刊本上 20a) 末尾の「ふみをぶんといひ〜和語にて其例多し。」がない。

・23 条の前に以下の段あり (他本ではないようだが、内容は 2 条と重複する)。「日本になき鳥獣草木に和訓のあるは、そのむかしゆへあることならん。今 (イマ) ばかりしるべからず。たち花はもしくは田道守 (タチモリ) がとり来りし故、田道花といふ事歟。」

・94 条冒頭に他本にない文句がある。「雲間儲泳？といふ書を見侍しに、今夜ノ之子ノ時、即是来日ナレバ、則今年ノ之子ノ月、当 (左；ベシ) レニ為来年トといへり。この論 (陽？) は一陽来復によりて□正の正にをよしとするよりいへるなり」＊胡汝嘉「辨歳本説」。あるいは「儲泳」作？『説郛』73 上、『稗編』62 にあり。

【下巻の様子】

・刊本にない 17 条、54 条、64 条はあるが、阪大写本にある 14 条はない。

・9 条、10 条、20 条、78 条がない。

・13 条は 60 条の後に、43 条は 100 条の後に、91 条と 92 条は順番が逆。

・19 条の「僧の人倫をたつ…」以下がない。

・77 条の「日本記纂疏に…」以下がない。

・80 条冒頭「二十をはたち」がない (阪大写本と同様)。

・8 条の後に「経典文字の渡しは、　応神帝の御時とかや。もろこしにて三国の時にあたる。然るに欽明紀に、秦漢の人を国々に分ちつかはさる、秦人の戸数七千五十 (＊中巻では「百」) 三戸とあり。是秦漢の時、乱をさけて日本に渡りし也。この人々の中に魯仲連ことまも有べし。然れば、この時に経典文字を日本の人聞しりぬらん。秦漢の間は孝霊孝元の御時也。開国神武帝を去る事近し。」あり。横に「このことは後編に詳に出せり」とある。中巻 17 条の内容と重なる。中巻は後編として編輯されたものだったのか？

阪大本中巻 17 条 (11a〜)

○余が先人の給ひし、「もろこしより経典 (けいてん) の渡 (わた) りしこそ、応神 (をうじん) 天皇の御世ともいふべけれ。文字の来りしは、これより先何れの時ならん、知べからず」となり。余 此説を述 (のべ) ておもふに、朝庭 (みかど) より、聘唐使 (へいたうし) を遣 (つかは) はれ、又、もろこしの天子よりも、使の来りしこそ、推古 (すいこ) 天皇のみ世に始りけめ。…

(6) 兼葭堂蔵書が幕府に召し上げられたことについては以下の文献に詳しい。

・有坂道子「研究ノート 木村兼葭堂没後の献本始末」(『大阪の歴史』54、p.53-80)

・井上智勝「兼葭堂の蔵書について」(大阪歴史博物館編『木村兼葭堂―なにわ　知の巨人』(思文閣出版、2003 年) 所収) に書目一覧があり、「茗話」も見える (p.164)。関係書：『兼葭堂書目』(中之島図書館 013/24) (下の「写本之部」に「茗話　一冊」とある)、『昌平書目』(中之島図書館 011/104) はともに中之島図書館にあり。『昌平書目』に以下のようにある。

近時浪華巨商有兼葭堂世粛者、捐千金購書、遂為奇書之淵藪。其人死子不肖、書多散逸。　官賜金購之。其書朱点其傍以別之。　…『茗話』には朱点が付いている。

(7) そもそも、刊本を作る際に複数のテキストが対校されたかどうかが疑わしい。「懐徳堂先賢著述書目」の記述は、刊本に「〜校」とあることから推測されたものではないか。

参考文献

[1] 五井蘭洲『蘭洲茗話』(懐徳堂記念会，1911 年)

[2] 吉田鋭雄編「懐徳堂先賢著述書目」(『懐徳』19 号 (1941 年) 所収)

[3] 拙稿「中之島図書館蔵懐徳堂関係資料目録」(『中国研究集刊』37 号、大阪大学中国学会、2005 年 6 月)

[4] 有坂道子「研究ノート 木村兼葭堂没後の献本始末」(『大阪の歴史』54、p.53-80)

[5] 井上智勝「兼葭堂の蔵書について」(大阪歴史博物館編『木村兼葭堂―なにわ　知の巨人』(思文閣出版、2003 年) 所収)

＊本稿は、平成 28 年度科学研究費補助金・基盤研究 B「懐徳堂の総合的研究」(研究代表者：竹田健二、研究課題番号：25284012) による研究成果の一部である。